清水幾太郎氏「核の選択 日本よ国家たれ」の先見性

中嶋嶺雄（なかじまみねお）
国際社会学者

てきた方針を変えてＮＰＴから脱退して核兵器をもてるとなれば、ＮＰＴ体制は有名無実化し、世界の核拡散が進む可能性が高い。そしてその結果、世界各地の地域紛争で核兵器が使用されるようになれば、世界は確実に混乱し、日本の経済的繁栄は損なわれるだろう。もちろん北朝鮮は核開発を更に推進し、その他のアジア諸国も対日警戒心を増大させ、日米関係すら揺らぐだろう。結局、日本の核武装は味方を減らし、脅威を増やして日本の安全保障環境を悪化させる。

そもそも核兵器の軍事的効用を過大に見積もるのは、二〇世紀最大の迷妄と言っても過言ではない。核兵器はまず使えない兵器であり、特に現状維持を志向する強国にとってはそうである。核兵器を使用して戦争に勝利しても、巨大な破壊の復興に対して道義的責任を負うことになるし、戦後の和解はより困難になる。国際的な評判も悪化する。実際、アメリカはベトナムで、ソ連はアフガニスタンで核兵器を使用することなく敗北を受け入れざるを得なかった。ごく限られた場合に核兵器に軍事的意味が生じることはあるだろうが、基本的には核保有を大国の証とみる見方が核を魅力的に見せているに過ぎない。

もちろん北朝鮮の核保有や弾道ミサイルが日本にとって深刻な脅威であることに疑いの余地はない。あらゆる外交努力を尽くして北朝鮮の脅威を除去する方策を探ると共に、日本の防衛力の向上も必要である。有事法制の整備は必要かつ意味のある行為であった。しかし、たとえば偵察能力の強化やミサイル防衛、民間防衛能力の拡大、そして日米安保に基づく打撃力の強化といった通常兵力の強化と戦略思想の改善の方が不確かな核抑止に頼るよりもはるかに効果的である。軍事技術の発展傾向を見ても大量破壊兵器は途上国のもつ二流の軍備となりつつある。今日の日本にとって核武装は時代錯誤の選択である。

様々な評価が可能な小泉政権ではあるが、今国会で有事立法を可決したことの歴史的意義は大きい。しかし私自身中央教育審議会の委員として全面的にかかわった教育基本法の改正に関しては、一年以上も集中的に論議した中教審答申が出されたにもかかわらず、今国会に上程もできないというのだから、政権が依然として政治より政局を優先している姿を露呈している。

このような政治の貧困が継続する状況下で、日本の核武装を論じ得る知的土壌があるとは到底思えない。理論的にも戦略論的にも、無理である。私自身、現在の日本が核武装することには賛成できない。一連の対中国位負け外交や対北朝鮮屈辱外交に露呈しているような日本政府、とくに外務省の貧弱な外交構想能力を不問にしたままでは、たとえ技術的に核を保有できたとしても、ほとんど意味を持たない。

核の保有は、単に軍事上ないしは防衛政策上の意味のみならず、国家の在り方、国家としての存在感、国家の品格にもつながる問題だからである。

本誌の読者なら、この問題については、すでに今から四半世紀近くも以前に、清水幾太郎氏が「核の選択　日本よ国家たれ」

と題する大論文を『諸君！』一九八〇年七月号に寄稿し、さらに同年九月に単行本が『日本よ国家たれ　核の選択』と題して文藝春秋より刊行され、多くの反響を呼んだことを記憶されている方が多いと思う。

清水氏は当時、戦後日本の代表的知識人にして最も数多い寄稿家としての体験ののちに、自らの責任で防衛・軍事問題の研究会「軍事科学研究会」を元自衛隊最高幹部を中心に組織され、その成果を同研究会との共著のようなかたちでまず小冊子『日本よ　国家たれ』として自費出版されたのであった。戦後日本の平和運動や原水禁運動にもかかわってこられた清水氏は、単行本の最後に収めた「『節操』と経験『あとがき』に代えて」のなかで、執筆の背景として「核に対する、異常というか、病的というか、とにかく、或る特別な態度が予め世間にあ」る状況に触れ、同氏は「日本が最初の被爆国であるという事実、それに由来する感情、これを夢にも軽く見るつもりはない。しかし、国際政治の戦国時代を生き延びるためには、如何に辛くても、核の問題をリアリストの眼で見なければいけない。アイディアリズムやセンチメンタリズムは、どんなに悲壮でも、あまり現実の役には立たない。そういう趣旨を簡単に述べたつもりであったのに、それさえ、既存の感情の波に呑みこまれそうである」と語っている。

清水氏が当時、タブーであった核武装の問題を、同氏が一所懸命に学ばれた軍事問題の一環としてとりあげつつも、より本質的には国家観の問題として、思想や哲学の問題として、さらには氏が一貫して追究していた倫理の問題として語り始めたのは、「日本が今まで漠然と自国の安全を託してきたアメリカの軍事的優勢が崩れて、ソ連の軍事的優勢が確立しようとしている」という状況認識があった。この点がソ連崩壊と東西冷戦の終焉という歴史の転換を経た今日との大きな相違ではあるけれど、核を象徴として「日本よ国家たれ」と語った同氏の問題提起は、今日でもきわめて新鮮であり、かつ説得的である。ということは、四半世紀近く経っても、日本社会の抱える戦後民主主義的惰性とその非国家的性格は変わっていないということになろう。清水幾太郎氏の先見性が改めて浮き彫りにされる所以である。

その清水氏は、一九八八年八月に逝去された。以後十五年、戦後の論壇と思想界にたいして、つねに先見的に問題を提起してきた清水氏については、論壇もジャーナリズムもこの間、まったくといってよいほど語らなかった。流行病のようにあれほど語られる丸山眞男氏に比して清水氏を論ずるつもりはないけれど、過去を語る丸山氏を論ずることの安全性に比してつねに未来を先導してきた清水氏を語ることの危険性にもよるのであろうか、あたかも清水氏の先見性を忘却することによって、自らの知的怠惰を帳消しにしようとする安全装置がどこかに仕掛けられているかのように私には思われてならない。

私はかつて同氏の逝去に際し、「清水氏は、あるとき広場の演壇でそこに集まった聴衆を唸らせていたかと思うと、いつの間にか姿を消して別の道へ去って行く。『広場の大衆』がそれに気づかないだけで、まだ清水氏の鼓吹に酔っているとき、彼は次の広場を求めて『孤独』な歩行を続けて行ったのである」と書いたことがある（拙稿「闇に立った予言者　清水幾太郎氏の晩年（下）」『朝日ジャーナル』一九八八年十月二

十一日号)。雑誌『諸君!』が今日に至って「是か非か　日本の核武装論」を特集することを、地下の清水氏が知ったら、氏はそれまで歩き続けていた地下の街角を人知れずに曲がって、次のぱっと明るい広場に出ているかもしれない。

米国が容認するはずはない

田岡俊次(たおかしゅんじ)
朝日新聞編集委員

四月二十三日から北京で開かれた米、中、朝三者協議の際、宴会場の廊下で北朝鮮外務省の李根・米州局副局長が、ジェームズ・ケリー米国務次官補に「すでに核を持っている。物理的に証明(核実験)するか、他国へ持ち出す(輸出)か、米国次第だ」と語り、同月三十日には北朝鮮外務省が報道官談話の形で「……現実は米国の封じ込め政策の強化を物理的に抑止することを求めており、我々はやむなく必要な抑止力を備えることを決心し行動に移さざるをえなくなった」と発表した。

韓国は九〇年に当時のソ連と、九二年には中国と国交を樹立し、中国との経済関係が飛躍的に拡大した一方、北朝鮮は孤立し、ロシアからの石油輸入が停止して経済は破綻状態にあるから、何とか米、日と国交を樹立して援助をえたいし、米が九三年六月、北朝鮮の核不拡散条約(NPT)からの脱退を思い止まらせるために米朝共同声明で約束した「武力不行使、内政不干渉」を再確認したい。米をその交渉に引き込むため「核保有」をちらつかせたのだろう。また米のイラク攻撃を見て怯え「核兵器がすでにある」と言って鉾先が自国に向くのを防ごうとしているとも考えられる。

だが、北朝鮮はプルトニウムを爆発させる「爆縮」技術の完成を確認するための核実験を一度もしていない。また核兵器はその存在を相手に知らせてこそ抑止効果、発言力を発揮する政治的兵器だ。特に北朝鮮は近代的戦力で決定的劣勢(例えばミグ29の操縦士の飛行訓練が年に約九時間)であり、威嚇と国威発揚の好きな国柄だけに、もし核兵器を持てば「物理的に証明」するだろう。何か核爆発装置らしき物を作ったとしても、直径一mのノドンや八八cmのテポドン第二段に搭載するには弾頭の直径もそれ以下、重量も一t以下にする要があると考えられ、米国が長崎に投下した最初のプルトニウム原爆MK3のように、重さ四・九t、直径一五二cmもの大型ではミサイル弾頭にならない。何回かは核実験をして技術を開発、確認しなくてはなるまい。

北朝鮮が核兵器を持っている、と言うのは本当か虚勢か首を傾げるところだが、少くとも北朝鮮が一月にNPT脱退を表明し、その後、小型原子炉の運転を再開したことなどから見て、核兵器の開発を進めつつあることはまず疑えず、もし核実験が行われれば抑止力として「日本も核武装を」との声が高まることは十分考えられる。

だが相互破壊による抑止戦略は双方の理性的判断を前提とし、相手が非合理な自暴自棄の行動に出るのを抑止力で防ぐのは困難だ。自爆テロに対し死刑が抑止効果を発揮しないのと同様だ。また価値がケタ違いの東京と平壌が差しちがえる覚悟がなくては、この戦略は成立たない。

それ以前に、日本が核武装するにはNPTを脱退し、米国との対立、世界での孤立を覚悟しなければなるまい。日本のGDP

Bunshun Opinion Magazine

諸君！

平成15年8月1日発行
（毎月1回1日発行）第35巻第8号
昭和44年8月2日第三種郵便物認可

2003 AUGUST 8
文藝春秋

百頁特集 是か非か 日本核武装論

日本国核武装への決断 中西輝政

日本核武装を否認する 青山繁晴

私のオピニオン——日本核武装 論客四十二氏の論点

櫻井よしこ/西部 邁/田原総一朗/江畑謙介/徳岡孝夫/多田富雄/岡崎久彦/中西 寛/中嶋嶺雄/田岡俊次/高山正之/森本 敏/米原万里/村田晃嗣/黒岩祐治/古森義久/重村智計/前田哲男/西岡 力/佐藤欣子/神谷万丈/坂元一哉/西澤潤一/田久保忠衛/佐瀬昌盛/渡部昇一 ほか

「NO」とは言わないアメリカ 伊藤 貫

帝国の影の下で Ⅲ 「自由」を我らに 福田和也

環境危機「木を見て森を見ず」の愚 渡辺 正+山形浩生

特集 対北朝鮮、「対話」だらけ「圧力」ゼロの紳士達

「田中 均」研究——その金脈（正日）と人脈（外務省） 山村明義

東大教授「姜尚中（カン サン ジュン）」——無辜の民を見棄てる冷たい「平和主義」 三浦小太郎

「和田春樹」よ、北朝鮮よりさらに北へ去れ 萩原 遼

朝日も麻生（政調会長）も「創氏改名」が分かっていない 永島広紀

「少年A」は本当に更生できたか 作田 明+黒沼克史+森下香枝

東京大学発「童貞」応援歌 上野千鶴子+渋谷知美

新企画 「今月の新書」完全読破 宮崎哲弥／麹町電網（インターネット）測候所

諸君！ 2003 8
百頁特集 是か非か 日本核武装論
特集 対北朝鮮「対話」だらけ「圧力」ゼロの紳士達